

Ken Shibusawa

次の世代へ、メッセージを伝えて

渋沢家5代目子孫 渋澤 健さん

日本初の銀行の創設や、株式(合本)制度の導入を図り、「日本の資本主義の父」と呼ばれる渋沢栄一。その5代目の子孫である渋澤健さんは、投資コンサルティング会社の代表である傍ら、数年前から渋沢栄一の研究者としての活動を開始。自らの著作等を通して、高祖父の業績とその思想をあらためて世に問いかけています。

意識をせずに過ごした青年期

「まだ幼い頃、子ども向けの本で渋沢栄一伝のようなものがありました。それを友だちに見せて『こればくのおじいちゃんだよ』とちょっと自慢したら、『そんなのウンだ』と一蹴(笑)。ホントなのになあ...と思ったのが渋沢栄一さんについての最初の記憶ですね」
 そう笑いながら語るのは、渋澤健さん。渋沢栄一の孫の孫、5代目にあたる子孫です。
 「実際、祖父ではなく、そのおじいちゃんです。ウソといえばウソでした(笑)。ただ、その後小学校2年から父の仕事の都合で渡米し、大学卒業までずっとアメリカ暮らしです。栄一さんのことを意識することもなく過ごしました。あらためて興味をもったのは、日本で働くようになり、投資コンサルティング会社を起業した2001年。会社を立ち上げるという節目に、明治の初頭に500以上の会社をつくったという祖先のことが頭に浮かびました。何か、自分にとって役に立つ言葉があるかもしれないと、父から譲り受けた伝記資料を読み始めたのです」

読むたびに新しい発見があるという渋沢栄一伝記集。「漢字や仮名遣いが読みにくく、父に翻訳を頼んだのですが『栄一さんって偉かったんだ』と再認識していました。父も銀行マンでしたが、何とも暢気ですね(笑)」。



色あせないメッセージ

幕末に現在の埼玉県・深谷の農商の家に生まれた渋沢栄一は、幼い頃から学問好きで7歳で「論語」に親しんだといわれています。「論語」は終生栄一の指標となり、その代表的講演録『論語と算盤』では、経済と道徳の融合を説いた栄一の思想が余すところなく語られます。

「彼が唱えたのは『道徳的資本主義』ですが、それは人にやさしいという意味ではなく、規律をもって経済にあたるということ。栄一は、国の根源は民間力」と唱え、民間の会社の設立などをライフワークにした人です。民間力とは、一人ひとりが国を造るという当事者意識と責任を果たすことから生まれるもの。それが、彼の信念でした。国が大きく揺れ、このままでは西欧社会に呑み込まれるという強い危機意識を持った人だから、その思想でした」

した。30年の長期投資を核にしたコモンズ投資を起業したのもその頃です。30年とはちょうど一世代。自分一人のためでなく、大切な子どもやその孫が、30年後に豊かで笑顔に包まれて暮らしてほしいという願いを込めています。未来のために種を蒔くということは、栄一さんにも通じるかもしれませぬ。
 これまで、栄一の子孫だからと特別の待遇を得たことはありません。私の子どもたちもそうでしょう。でも今、栄一の言葉を偉大な先人というだけでなく身近なものに感じ、そのメッセージを多くの皆様にお伝えできるのは、本当に光栄なことだと思っています」



1840年(天保11年)に生まれた渋沢栄一は、農商の子でありながら、才能を見いだされ一橋慶喜(後の徳川慶喜)に出仕。幕臣となり、後に明治初期の大蔵官僚となるも民間の力を信じ実業家に転身した傑物でした。彼が創設に関わった株式会社は第一国立銀行、東京海上火災保険など多業種にわたり、その数500以上。また、教育・社会福祉事業約600団体の設立に関与し、「公のために尽くし、利益を社会に還元する」という倫理観を貫いた経済人です。今、その高潔な思想と実行力が再び注目されています。

写真：国立国会図書館「近代日本人の肖像」より

子から孫へ。その先へ...

数十冊の伝記資料を読み進めるうちに、健さんは栄一の言葉が、現代でもまったく色あせていないことに気づいたといいます。
 「世界の競合相手に立ち向かい、新しい日本を築く必要に迫られているのは現在でも同じ。100年前の、危機意識をもった人々がどんな言葉や考え方を持っていたか——そこに、日本の将来へのメッセージがあるのではないか。それが、私の栄一研究の最大の理由です」

次世代にメッセージを伝えるという意識は、健さん自身、38歳で結婚し、自分の家族を持つたときから芽生えたといいます。
 「20代30代は自分を高めていくことがテーマでしたが、家族を持ったことで自分の中の軸が変わったように思います。子どもたちのために、何か伝えなければという思いを抱きま



渋沢栄一の伝記資料および、日本経済史の史料は、渋澤健さんが理事を務める渋沢栄一記念財団(東京都・北区)に数多く保管され、閲覧することができます。右側の本は、健さんが繰り返し読む『論語と算盤』(国会刊行会版)。「言葉は残る。それはすごいことです。私自身、本を書くことで子どもたちに残せるものがあればと思っています」と健さん。